

## 大巻伸嗣 地平線のゆくえ

大巻は、本展に先駆けて青森県内各地をリサーチするなかで、弘前市鬼沢地区に残る、鬼が腰掛けたという伝説のある柏の木と出会いました。本展ではその柏の葉をモチーフとした作品を、展覧会のはじめと終わりに象徴的に用いています。春になり、新しい葉が芽吹くまで落葉しないという柏の葉の姿を、人間の生と死の営みと重ね合わせて、次の世代へと引き継いでいく姿を作品化しています。

柏の葉に導かれながら展示室に入ると、上からゆっくりと光の玉が静かに落ちてきて、煙となって消えていきます。床に敷き詰められているのは、地元のリサイクル施設で廃棄物を高温で処理する際に発生した「スラグ」と呼ばれるガラス状の残渣(残留物)です。黒いスラグの海に消えていく光の玉は、命の始まりと終わり、そしてまた生まれてくる新しい命を想起させます。

さらに奥へと進むと、真っ白な画面に白い修正液とクリスタルで描かれた《Echoes Crystallization: Horizon》が鑑賞者を迎えてくれます。目を凝らすと、伝説の桃源郷にある蓬莱山を彷彿とさせる山と、その山が水平線の先に映り込んだ不思議な光景が広がります。振り返ると、向かい側の黒い壁には錐体状に暗くぼみが切り抜かれています。白い光の風景と闇の中に浮かぶ消失点は、どちらか一つだけでは存在することのできない陰陽の関係性を浮かび上がらせます。



\*作品にはお手を触れないでください。  
\*2, 3, 18をのぞき、展示室内を撮影いただけます。  
\*アンケートご協力をお願いします。  
\*QRコードからアクセスしてください。



### 1F

- 1 Oak Leaf - the Given - (Right) 2023年
- 2 A Blink of Eternity 2011年
- 3 sink 2023年
- 4 Echoes Crystallization: Horizon 2023年
- 5 Depth of Shadow - Vanishing Point- 2023年

\*本展の音声ガイドをこちらのQRコードから聞くことができます。  
お手持ちのスマートフォンでお楽しみください。

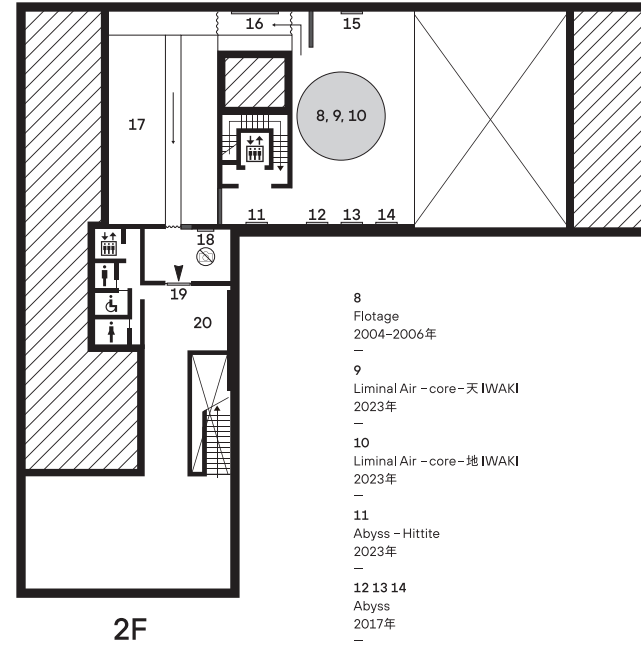


暗い森の中に足を踏み入れると、どこからともなく何かをたたくような音が聴こえてきます。これは、キツキが木をつつく音にも、ヒトが何かを削り出す作業の音にも聞こえます。大巻は弘前の森の中で、キツキたちが交信するように発する音を耳にしました。彼らは今いる世界から向こう側へと新しい窓を開けて、遠くの土地との交流を促す使者なのでしょう。あるいは、目には見えない音だけの交信によって、この世とあの世をつないでいるのかもしれない。

- 6 KODAMA 2023年

一枚の薄い布が有機的に波打つように動く大巻の代表作の一つ「Liminal Air Space-Time」の新作バージョンが、美術館の巨大な吹き抜け空間に広がります。青森県内で大巻が初めて目にした海辺の風景や、力強くも暖かく包み込むような独特な波のイメージや音を、鑑賞者は身体全体を使って感じることができます。作品から聞こえてくる音は、津軽地方在住の方々の声を集めて作られました。

- 7 Liminal Air Space-Time: 事象の地平線 2023年



- 8 Flotage 2004-2006年
- 9 Liminal Air - core-天 IWAKI 2023年
- 10 Liminal Air - core-地 IWAKI 2023年
- 11 Abyss - Hittite 2023年
- 12 13 14 Abyss 2017年
- 15 Abyss - Jomon 2023年

### 2F

展示室内の白いフェルトの床一面に描かれた色とりどりの花や紋様には、大巻が新たに青森県内各地で見つけた植物や風物、紋様も取り入れられています。観客はその中央を歩いていながら、雪の白から生まれ出るような春の光と色の世界に包まれます。

あわせて通路に展示される《Glass of Echo》は、花々を一つ一つ描くときに型に付着した岩絵具を丁寧に集めて、グラスへと注ぐことで可視化された時間の集積を示しています。自然の持つ大きな時間の流れや、鑑賞者たちが持つ過去の記憶など、さまざまな時間の層に思いを馳せることとなるでしょう。

- 16 Glass of Echo - Hiroasaki- 2023年
- 17 Echoes Infinity - trail- 2023年

映像作品《Before and After the Horizon》のインスピレーションの元となったのは、ブラジルの作曲家アントニオ・カルロス・ジョビンが手がけたボサノヴァの楽曲「三月の水」です。本楽曲は、さまざまな困難に立ち向かいながらも混沌の時代を生き抜く作曲家の姿を表しています。その世界観は、厳しい自然環境の中で春の訪れを信じて、次の世代へと命を繋いできた青森の人々の姿と結びつきます。映像では、大巻が出会った青森の風景に、地元の歌い手から紡ぎ出される津軽弁の響きと軽やかな旋律が重なります。

窓に設置されているのは、当館の新規収蔵作品となった和田礼治郎の《AMBER WINDOW (HIROSAKI)》です。窓の外の風景を黄金色に変容させるガラスパネルの内側は、アップルブランデーで満たされています。本展の根幹にある、土地と人々の記憶の再生と創造のイメージが、煉瓦倉庫から美術館へと変貌を遂げた建物を映し出す和田作品とつながります。

- 18 Before and After the Horizon 2023年

巨大な壺の形が描かれた《Abyss》は、一見すると白と黒のシンプルな構成です。しかしその表面を見つめると、重なりあって潜み、さまざまな時代と場所で人間が築いてきた文明のモチーフに気がつくでしょう。

足元に広がる《Flotage》には、切り裂いた大地を縫うようにつなぎあわせた世界地図が、揺れ動く無数の線と共に緻密に描き込まれています。円形の作品の外側から中を覗き込むと、壺の底にある深淵を垣間見るような感覚にも包まれます。《Liminal Air - core-天 IWAKI》《Liminal Air - core-地 IWAKI》は、弘前のシンボルである岩木山が織り成す空と大地の風景をモチーフにしています。ゆっくりと回転しながら、この世界を掻き混ぜて新たな混沌を生み出しているかのようです。重なる線のふれや、映り込む環境、回転運動によって、絶えず流動する中で世界を捉えようとする作家の視点が見えてきます。

本展の入り口と同様、出口でも柏の葉が鑑賞者を迎えています。暖簾に染め抜かれた葉に浮かぶ複雑な脈は、柏の葉脈に、作家の手のひらの血脈を重ね合わせたものです。入り口と出口の柏の葉は、始まりと終わりを象徴するあうんの関係を成しています。鑑賞者は、あたかも身体の中を流れる血流のように展示室を移動し、最後に暖簾をくぐり抜けて、次の世界の始まりへと向かいます。暖簾は、地元の藍を原料とし、すくもと灰汁だけで染める伝統的な技法「地獄建て」を用いる作り手の協力のもと、制作されました。

- 19 Oak Leaf - the Given - (Left) 2023年

20 アーカイブスペース  
本展のために、作家が津軽地方を中心に県内をリサーチした際の写真や作品制作のために描きためたドローイングなどを展示しています。書籍は手にとって自由にご覧いただけます。

—